

## VERA計画推進の思い出

関西学院大学教授（当時国立天文台電波天文学研究系教授） 中井直正

長い間ずっと光学観測で実施されてきた地球回転・測地の研究を経験のない電波観測で行う方向に大転換された勇気とその後の長く苦しい生みの期間を粘り強い努力でVERA計画を実現されたことに深く敬意を表したい。筆者が大学院に入学した40年前にはすでに電波観測の構想が始まっていたようであるが、筆者は野辺山宇宙電波観測所に長く在籍していたときから水沢観測所の人たちと顔を合わせていた。また、1987年にあった水沢での経緯度研究会で晩期型星の水メーザー観測の提案からはある種の研究仲間としての意識があり、さらに国立天文台の教授会構成員や電波天文学研究系の研究主幹としてはVERA計画の実現を支持してきた者として思い出すことをいくつか述べてみたい。

VERA計画の最大の功労者の1人は主導された笹尾哲夫氏である。全く新しいことを始める常として多くの反対や疑義、冷ややかな視線、対立する意見や圧力、組織をまとめていく苦勞など大変な困難に会いながらも粘り強く推進された。あまり内部のことはうかがい知れないが、水沢における従来のいろいろな研究をVERAとRISE（および地球重力測定）に集約されたときの内部での葛藤は漏れ聞こえてきた。また、国立天文台の内部では、合併した水沢観測所（地球回転研究系）に対してはよそ者の感覚があり、VERA計画に対しても冷ややかな視線があった。その中であって概算要求を議論していた教授会で位置天文・天体力学の宮本昌典氏が「10マイクロ秒角が実現されるのであれば私は賛成する」と言われ、太陽の小杉健郎氏が「VERAは合併時からの実現すべき計画として天文台の宿題である」と言われたことは概算要求提出の強い追い風になったと思う。

国立天文台の他研究系では、あわよくば水沢観測所（地球回転研究系）のポストを取り込みたいという気持ちがあったようである。筆者は同じ電波として電波天文学研究系と地球回転研究系は協力してやっていくべきだと思い、またVERAは実現しないといけないと思っていたのでポストの配分を決める分野選定委員会では「地球回転は天文台の要請に応じて大変な議論の末に研究を2つの分野に集約した。よって天文台はそれに応じるべきであり、VERAの13ポストはそのままVERAにつけるべきである」と主張し、認めてもらった。そのあとの正月に地球回転研究系研究主幹の横山紘一氏から布か分厚化粧紙の見開きの大変豪華な年賀状をいただいたのには驚いた。

ほかのことではあまり貢献できなかった。当時、水沢には大きな電波望遠鏡を作った経験者はいなかったため天文台長からは野辺山から人を出すように言われたが、LMSA（現在のALMA）計画の推進のために人のやりくりで窮していた野辺山としては宮地竹史氏に行ってもらうことしかできなかった。人員不足は筆者の力ではどうすることもできず、大変申し訳なかった。

建設予算を獲得してVERAを実現したもう1人の功労者は鹿児島大学の面高俊宏氏である。VERAの概算要求はなかなか通らず、補正予算でも下位の順位に位置付けられて通る見込みが少なかった。それを人脈と政治力を活かして優先順位上位に位置付け、財務省にも働きかけて補正予算を通したのは面高氏である。面高氏の尽力なくしてVERAは実現していなかったかもしれない。

最近では自分達の頭では考えず、欧米が考えた大型計画に乗っかることばかり考える風潮がある。それゆえ日本の天文学の将来が心配であるが、野辺山やVERAを実現された先人達の軌跡をもう一度振り返り、学ぶことは日本の天文学の発展に有効なことであると思う。